



「本日の書簡と報告書です」

執事の言葉に、メフィストは書類から顔を上げることもなく、机の一角を指す。

執務室は既に明かりが落とされていて、机の読書灯だけが煌々とした明かりを放っていた。主人の椅子の横には、ワゴンに載せたポットと急須が用意されている。今日は珍しく遅くまで仕事をすつもりのようだ。余程気に入った何かがあったに違いない。

それが何なのか。例えば知りたくなくとも主人が必要だと思えば、嫌でも知ることになる。だから今は知る必要はない。ただ、主人が起きている間は、執事である彼も休めない。今はそれだけ知っていればいい。

指示された執事は、机の片隅に積まれたままの手紙の山を見て少し眉を顰めたが、すぐに表情を消した。主人は『仕える者』が『役に立つ間』は寛大だが、そうでない者には容赦がない。その判断が気分によつて左右されるのは理不尽だが、ここでの待遇はそれを補つて余りある。執事は敢えて今主人を邪魔するか、それとも黙つて自分に求められている行動を取るか、瞬時にはじき出す。そして後者を選んだ。

そつと机に近付いた彼は、積み重なつた手紙を整理し直す。主人宛のもの内、余程プライベートなものでない限りは、執事が開封していいことになっている。主人の決断を仰ぐまでもない用件は、彼が処理するからだ。従つて内容は既に一度目を通して完璧に記憶している。二度手紙を開く必要はない。それに、主人の判断が必要かどうか、迷うことも

ない。ここに持つて来るまでに下調べも完璧に済ませてある。よつてここにあるのは、主人でなければ決断できないものばかりであるはずだ。それを敢えて、更に優先順位の高いものから順に並べる。そして最後に主人宛のプライベートな手紙が残った。

執事はその束の中に小さな封筒があるのに気付いた。封筒の型押しされたデザインから特注品だろう。流麗な宛名の文字はペンにインクをつけて書かれていた。今時珍しい。裏を返すと、差出人はなく封蝋があつた。これまで見たことのないものだ。赤に金粉が混ざつた封蝋に凝つた飾り文字の『V』が几帳面に押しあつた。ほんの僅かだが芳しい香りがする。香水か便箋用の匂い袋だろう。ここ数日処理した書簡の数々を思い返すが、該当する物を処理した覚えはない。

それが意味する所に気づいた執事は、手が震え始めるのを止められなかった。

これは彼の与り知らぬ封筒なのだ。

この屋敷に届いたものが何であれ、執事である彼を通さずに、直接主人に届けるような真似をする者はいない。

つまり、この封筒は直接届けられたのだ。

彼の知らぬ何らかの存在が、何らかの力を使つて。

この屋敷で勤めるには『知つてはいけない』ことが幾つかある。例えばそれがいかに摩訶不思議な現象であろうと、それがなんなのか、知ろうとしてはいけない。見ても見ぬふり、聞いても聞かなかつたふりをする。それがここで長く勤めるコツだった。

今知る必要があるのは、これが主人へ宛てて直接届けられたものであること。そして、それは恐らく主人の不興を買つても、存在を知らせ

ねばならない事態だということだ。

いつだ？ いつからこの封筒はここにあったのだ？ 昨日か一昨日か？ いずれにせよ、これは今すぐに処理しなければ、自分のクビが危うい。いや、クビどころではない。命そのものが危ない。

執事はごくりと唾を飲み込んだ。彼の前任者がどんな風に『解雇』されたか、目の前で見ていた彼は、湧き上がる恐怖に体が震えるのを抑えられなかった。

「旦那様」

書類を読むメフィストの眉が、煩そうに寄せられる。よりによって、一番興の乗っている所に声を掛けたりしい。

「至急のお手紙が届いております」

主は苛立たしげに差し出された封筒を奪う。面倒くさそうに宛て名を見て、ちらりと裏を返したメフィストの顔がたちまち青ざめたのを見て、執事は声を掛けて良かったと心底安堵した。

\*\*\*

「うあ、朝早すぎて吐きそう……」

「また二日酔いですか」

奥村雪男が欠伸を洩らす霧隠シユラを睨んだ。毎度のことながら、今日は殊更にイラつかされる。本人はもう一度、ふわあ、と大きな口を開けて欠伸をすると、滲んだ涙を「ごし」と擦った。

塾生達は呆れて苦笑いをしながら、雪男とシユラのやりとりを見ている。現場まで移動するパンの中だ。助手席にダルそうに座り込んだシユラはそこから動こうともしない。車を運転のは上二級祓魔師の中年に差し掛かった男性だ。彼が今回の副隊長だが、運転しながら任務の説明をするわけにはいかない。仕方なく雪男が後ろの席に座る塾生達を纏めなければいけなくなっている。

二日酔いでフアラフラの上司に、それをしようがないと受け入れてしまっている候補生たち。これが当たり前であってはいけないのだ。それよりも、毎度毎度シユラとの任務を振り分けてくる騎士團の誰ぞはワザとだろうか、と苛立ちでこめかみがひくつくのを乱暴に手で擦った。

「ビビリ、説明」

もう一つ大きな欠伸をするシユラの口に、車の揺れにかこつけて拳を叩き込んでやりたい誘惑を何とか抑え込む。悪路でがたりと車が揺れた衝撃に、しかめつ面を紛れさせると、やたらと波立つ気持ち切り替えた。まさか候補生達に八つ当たりするわけにはいかない。

「本日の任務は、悪魔の仕業と思われる現象の調査です」

タブレット端末に送られてきた資料を見ながら説明する。場所は正十字学園町の外れに建つ洋館だ。候補生たちに画面を見せる。覗き込む顔が一张张に驚いた顔をした。それもそうだろう。『古びた』なんて表現は生温い。今にも崩れ落ちそうな廃屋、と言ったほうが正しいのではないかと思われる有様だからだ。

「まさか、吸血鬼の館」

写し出された写真を見て神木出雲がぼそりと呟いた。  
「ソレ聞いたことあるぞ」



奥村燐が彼女の眩きを耳ざとく聞きつける。

「俺も寮のヤツラが話しとるの聞いたな」

「正十字学園町の七不思議、言われてはりますね」

「七不思議って学校だけじゃないんだね」

勝呂竜士と三輪子猫丸の言葉に杜山しえみが呟いた。若干嬉しそうなのは気のせいだろうか。学園の七不思議の内『絶対たどり着けない屋敷』が彼女の家でもある『祓魔屋』だと知ったとき、恥ずかしがる一方で面白がっても居たと後から聞いた。昔の彼女に比べて随分変わったなあ、と思う。いや、これが本来の彼女の姿なのかも知れない。

『七不思議なんてどこにでもあるじゃねーか』

宝ねむの腹話術人形がバクバクと口を動かした。相変わらずバカにしたような口調だが、しえみは気にした風もなくそうなんだ、としきりに感心していた。

「でもさ正十字学園町の七不思議って七つじゃねーよな」

燐たちは自分の知っている七不思議を披露して、自分の知らない分についてあーだこーだと話し合っている。宝の言うとおり、七不思議は何処にでもあり、パターンも一つとは限らない。ともあれ、洋館だ。雪男は咳を一つして、候補生たちの注意を引いた。

「さて。その洋館ですが、七不思議では言われているのは……」

「怒らせたら出てこれない」

燐が得意満面の笑みで遮った。勉強じゃないものは覚えが良いわけね。兄のドヤ顔にちらりと苛立ちが募ったが、いつものことだと思いついた。

「その通りです」

雪男は調査資料のファイルを開く。独自に予備調査を行ったものだ。

この屋敷にまつわる噂は、かなりの数に上った。曰く、商売下手の大名華族に仕えていた執事が、騙されて非業な死を遂げた主人一家の仇を取ろうとしてこの屋敷で殺されてしまった。あるいは公家の血を引く少女が住んでいたが、世間から隔絶されて育てられたために生活力がなく孤独死した。明治政府時代の参議だかの愛人が困っていたが、とつかえひつつかえ男を引つ張り込んだのは、夜な夜な淫らがましい行為に耽っていたとか、魔宴だか怪しい儀式だかを行いこの世のものでない力を得ては、影から政治や経済を操ったとか。それらを全部繋ぎ合わせたような話まであった。

「愛人とやらの話、詳細は判れへんのですか？」

話の一部に過剰に反応した廉造に、周りから冷たい視線が浴びせられた。普段ならするりと流せる彼の言動にも少しイラつとさせられる。

些細なことで苛立つのは判っていたが、今日はちよつと酷すぎやしないだろうか。いや、ここ最近、か。

ヴァチカンでの上級会議に呼び出されてから、どうも自分の感情が上手く制御できていない気がする。イライラと首筋を擦った。耳の後ろから肩に落ちる喉の筋がパンパンに張っていて、触るのも痛い。どうやら緊張やら疲労やら、色んなものを溜め込んでいるらしい。判らないことが多すぎるせいだろうか？ 兄がじゃれついでくるのも、なんだかその気になれずに疲れているの言い訳に避けてきた。兄にそんな態度を取りたいわけではないのに。それでも気にかかるあれこれが整理できないほど多すぎて、他のことが全て疎かになっている。沸点が低いのも、そのせいかも知れない。

「吸血鬼じゃないよな」

燦が話を交える。雪男の苛立ちも逸らされて急に醒めていく。小さく溜め息を吐いた。

雪男が調べた所でも、吸血鬼の名が冠されていることに満足の行く答えは、一つとして見つからなかった。そう告げると塾生たちも不満顔に黙り込んでしまう。

「与太話を真に受けても意味ねーよ。問題はこれまでは起こらなかったことが起こったってことだ」

シユラがボリボリと頭を掻きながら、背凭れに頸を乗せる。

永く人の住まない洋館は、今や肝試し、怖いもの見たさに冷やかに来る若者たちで、ある意味賑わっている。夏の夜などには近隣の町や県外からわざわざ出かけてくる物好きも居るほどだった。人家から相当離れているにもかかわらず、そこを訪れた者たちの騒ぐ声で、たびたび警察が呼ばれるほどだった。正十字学園の生徒でも、夜中に寮を抜け出して肝試しに出掛ける新入生が毎年現れるそうだ。当然ながら寮監に見つかって、厳しい罰則を食らわされるハメになるのだが、それでも毎年挑戦する生徒が後を絶たない。

「隊長の言う通り、これまでこの館で行方不明になったケースはありませんでした」

怒らせたら出てこれない。その一文に何かが滾るのだろうか。屋敷に入り込み、ワザと怒らせるようなことをする。証拠写真だと小火で煤けた写真をネットに掲載している者までいた。大人しい例だと、交霊会や百物語をしたりするらしい。どこぞには定期的に『幽霊屋敷』などと呼ばれている廃屋を廻って、こうした会を開く団体まである。雪男には全

く理解できない世界で、仕舞いには頭が痛くなったほどだ。

火傷では済まない大怪我をするかも知れないのに、敢えて危険を冒しても、本当は何が起こるのか、そこが知りたいらしい。それでも、これまで出て来れなくなった者たちは居なかった。

「二週間前に霊媒師と名乗る男性が、屋敷の噂を聞きつけて、ここへ向かったそうです」

在野には独学で祓魔を覚えた人が居ないこともない。だが、こうして自ら飛び込んでいく人に正確充分な知識のあった例がない。雪男ばかりではなく、正十字騎士團にしてみれば、肝試しで入り込む子供たちと大差なかった。

「何日経っても帰ってこないの、関係者が捜索願を出しました。警察も依頼を受けて周辺の聞き込みから、つい三日前に屋敷に入ったことが判ったため、捜索を行ったようですが、見つからなかったそうです」

候補生たちが顔を見合わせた。彼らの意識が集中してきたことにほっとする。

「見つからなかった言うんは……?」

子猫丸が尋ねる。秋口に入ってからの実戦任務で、どうやら自分の方向性を掴んだらしい。彼のように祓魔技術だけでなく、素早く状況を把握し、祓魔師達の技量を考慮して戦術を立てられる参謀役が一人居るだけで、隊の行動がピリッと引き締まり、任務の効率も上がる。元々優秀だったのが、團でも密かに期待されていた。

「二つ理由があります。それが騎士團へ捜査権が移った理由でもありませんが」

雪男はメガネのブリッジを押し上げた。